

堀河百首題「荒和祓」をめぐる

内藤 愛子

堀河百首題の四季題は、屏風歌や初期百首歌の影響や関連については既に指摘されているように、堀河百首題と初期百首歌の主題や屏風歌の画題が単に共通しているだけでなく、歌題設定の過程への影響や詠作方法にも影響が見られるとしている¹⁾。今回は夏季の歌題のなかで屏風歌の画題や初期百首歌の主題にみられる歌題である年中行事に関わる「荒和祓」を取り上げてみたい。殊に、『堀河百首』の詠出歌人達がどのように歌題を捉え詠じたかという題詠方法を捉え、歌題の特質や詠法の特徴を分析することによって堀河百首題「荒和祓」の特徴や歌題の本意を探ってみたい。

二

『堀河百首』成立以前において「荒和祓」は歌題として見出すことが出来ず、新奇な歌題といえるであろう。「荒和祓」は、大祓の一つで六月の晦日に行われる「六月祓」「夏越祓」の異称であり、屏風歌や定数歌では「六月祓」「夏越祓」という画題や主題として散見することができる。だが、堀河百首題において「荒和祓」と歌題設定なされには、なんらかの意図を基に成されたと考えられるだろう。行事としての「六月祓」「夏越祓」は諸人の罪状を贖って、家々を守護する荒神を怒りの表情を和ますため半年毎に祓を行い、その祓の方法は様々な方法で行事が成されている。

まずは、『堀河百首』成立以前において「六月祓」「夏越祓」がどのように詠じられていたかを行事としての荒和祓との関係を踏まえながら検証し歌題化の変遷を具体的に辿ってみたい。「六月祓」「夏越祓」は屏風歌や定数歌において夏の画題、主題としてあり、屏風歌や定数歌との影響関係を踏まえながらみていこう。殊に、月次屏風歌では六月の画題として「六月祓」が数多く見出される。また、初期百首歌や定数歌において夏の主題としては『好忠百首』やが初出と言えるであろう。

まず、六月祓、夏越祓を画題とした屏風歌を取り上げてみよう。数多くの屏風歌を詠じた歌人を中心に抽出してみると「六月祓」の屏風歌が貫之、躬恒、元輔、順、忠見、能宣、中務の歌集に見出すことができる。それらの「六月祓」「夏越祓」の画題は月次屏風歌に数多くを散見される。それらの歌集を検索してみると、多数の屏風歌を詠じた貫之がやはり「六月祓」を詠じた屏風歌も多数挙げられる。ちなみに、『貫之集』（『私家集大成中古I』57）から「六月祓」の屏風歌を抽出してみると次の五首が挙げられる。

11 みそきする河せみれはから衣ひもゆふくれに波も立ちける

（延喜六年月なみの屏風八帖が料の歌 六月祓）

107 比かにははらへてなかくすことのはは浪の花にそたくふへらなる

（延喜十八年四月東宮の御屏風 祓へしたるところ）

132 おほぬさの河の瀬ことに流れても千とせの夏はなつはらせん

(延喜十九年東宮の御屏風うちより十六首 六月祓)
394みそぎつ、思ふ心はこの川のその深さにかよふべらなり

(天慶三年閏七月右衛門督殿屏風の料十五首 六月祓)

526うき人のつらき心を比川の波にたくへてはらへてそやる

(天慶八年うちの御屏風のれう廿首 はらへ)

これらは、五首いずれも屏風絵との関係からか、六月祓が行われる場所である河川が詠み入れられ、「川瀬」、「波」等の河川に関連する歌材や縁語に拠って詠作されている。それらを年代順に挙げてみると初めの三首(11・107・132)は河で行われる六月祓を主として詠んでいる。そのうち、107の屏風歌は罪や穢れとなった言葉や幣に書いて水に清めて流す儀式を詠じている。また、この歌の二、三句目「はらへてなかずことのは」に拠った屏風歌として『信明集』36(『私家集大成中古I』78)の六月の屏風歌がみられ、明らかに、貫之の詠歌の表現を撰取したものと捉えられるであろう。

36みなかみにはらへて流す言の葉をおりなくこそせせのしら波
また、132の詠歌は行事の被具である大幣を歌材とした詠歌である。それは川瀬の白波と幣で川が白く描かれた様子から発想されたのだろう。同様に六月祓の道具である大幣に拠って詠じた屏風歌が二首挙げられる。『能宣集』12(『私家集大成中古I』87)、『元真集』177(『私家集大成中古I』81)に見出せる。

12みそぎする川の淵瀬に引き網をおおぬさなりと人やみゆらん
177おほぬさにはらへやるともこの川に波はしるらぬふかき心と
これらの屏風歌はいずれも貫之の歌を基にした詠歌と捉えられる。殊に、元真の詠歌は貫之の詠歌(394)典拠とし、六月祓を恋歌など想起させる人事詠であろう。

次の二首(394・526)は六月祓に恋の思いを寄せた人事詠のである。

394の詠歌は「みそぎ」「川」に拠った恋の歌である『古今集』の恋一に読み人知らずの歌(501)を発想の基として恋する思いの深さを詠じている。

501恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも
また、526の詠歌は「憂き」を「浮き」に掛け、六月祓に事寄せて恋の恨みを詠じている。

このように、貫之の屏風歌における六月祓を年代順に挙げてみると、描かれた屏風絵との関係を無視できないが、明らかに発想の変化を看取できるであろう。また、このように屏風歌における「六月祓」は貫之の発想や歌材、技巧等の詠作方法の影響関係がみられ、貫之の六月祓の屏風歌が基となることが指摘できるであろう。

次に、定数歌における「六月祓」「夏越祓」を取り挙げてみよう。まず、『好忠集』(『私家集大成中古I』105)をみると、好忠百首の夏の十首に

388みなつきのなこしとおもふこ、ちにはあらふるかみそかなはさ
りけり

とあり、順百首歌に
503ゆふたちにや、くれにけりみなつきのなこしのはらへせてやす
こさん

とあり、『毎月集』三百六十首和歌には六月のはしめに
155けふよりはなこしのつきになりぬとてあらふるかみにもな
あるなひと

とあり、六月中に
174みそぎするかも河風ふくらしもす、みにゆかぬいとともなひ

とある。388・503は六月の夏越祓と表現し、夏越祓を夏の歌材として用いている。「なごし」は同時代の屏風歌に、六月夏越祓の表現も散見される。殊に、詠歌(174)は六月中に中に配列され、「禊する」とあり、川辺で行うことから夏越祓を背景にし涼しさを主題としているが詠歌と捉えられるであろう。また、「六月祓」の画題で、涼しさを詠み入れた屏風歌としては『元輔集』67(『私家集大成中古I』113)や『兼盛集』147・162(『私家集大成中古I』114)に

67 河波のたちかえりつ、禊して千代のみかげにすずしからなん

147 河風吹くるかけにふきつくし祓ふることそ涼しかりける

163 河風の涼しからすはみな月の祓はかりにもうからまし

とあり、それらは祓を行うことに拠って心が清澄になることを涼しとし、それに涼しさを掛けた屏風歌である。67は実頼公五十算賀の屏風歌(969)で、『毎月集』の成立は天禄二―三年(971―972)とされていることから好忠の174の歌はこれらの詠歌を基にした詠歌と言えるのではなからうか。また、既に指摘されているように『毎月集』と屏風歌との影響関係がこの詠歌においても看取できるであろう。²⁾

好忠の詠歌(388・155)はいずれも、荒ぶる神を詠み入れているのは注目されるであろう。「荒ぶる神」は『古事記』、『風土記』に求めた歌材であり、「荒ぶる神」を「夏越祓」に詠み入れた例歌はみえず好忠が初出と言えるであろう。好忠百首388の歌は「なごし」に「和し」を懸け、「荒ぶる」に呼応した技巧に富んだ機智的な歌である。しかも、「夏越祓」は荒ぶる神を和すということを行事として詠じている。

「荒ぶる神」を詠み入れている歌を挙げてみると、『源順集』173(『私家集大成中古I』105)の屏風歌や『藤原長能集』66(『私家集大成中古I』140)の月次屏風歌に見出せる。

173 よきことをきかず荒ぶる神たにも今日はあらじと人は知らなん
66 さはへなす荒ぶる神もおしなへてけふは夏越のはらへなりけり
「荒ぶる神」の詠歌は既に指摘されているように、順の屏風歌(173)は好忠百首の詠歌(388)の影響であり、好忠の三百六十首和歌の詠歌(155)は順の屏風歌を踏まえて詠んだとしている。³⁾殊に、長能の詠歌(66)は好忠の詠歌との影響関係が考えられ、『日本書紀』や『万葉集』に求めた「さばへなす」と言う歌語に拠って夏越祓を詠んだ特徴的な一首と言えるであろう。

このことから、好忠百首の夏越祓の詠歌の影響が認められ、好忠は夏越祓を荒ぶる神を和す行事として捉えていたと推測出来るよう。

また、好忠百首以後、百首歌や定数歌において夏の主題として「六月祓」「夏越祓」を主題とした歌が配されている傾向が看取される。それらは既に指摘されているように、千穎や加茂保憲女や重之女の百首歌、和泉式部の定数歌、百首歌や相模の湯走百首に「六月祓」「夏越祓」を主題とした歌見出⁴⁾ことが出来る。殊に、『千穎集』21(『私家集大成中古I』108)に

21 みなつきのなごしのはらへするせ、にあさはなたなるそぬきみ
ゆらし

とあり、好忠の歌(388)の「みなつきのなごし」を典拠とし、「瀬々」という祓を行う場と祓の道具である幣として使用される「麻葉」の物名歌のように詠み入れたか、「そ」を麻の別称と解することも出来る。いずれにしても技巧によって夏越祓の様子を詠じている。また、その歌を基にしたと思われる『和泉式部集』39(『私家集大成中古II』1)の百首に「麻葉」を詠み入れた歌が見出される。その歌は「六月」に「みなつき」を掛け、思いを祓うとし、人事詠と捉えることでもであろう。

39 思うことみなつきねとてあさのはをきりきりてもはらひつるか
な

また、『重之女集』31・97（『私家集大成中古Ⅰ』147）の百首歌や
月次歌にやはり、川に関わる「岩瀬」、「水上」、「岩の上水」や六月
祓の道具である大幣や幣を作る木綿が詠み入るといふ詠作方法によ
つて罪を祓い流すという行事に視点を置いた詠歌である。

31 おほぬさにはらへたれともおちてゆくはつせのなみこ、ろあら
なん

97 みなかみにはらへてけふはくらししてんゆふつけわたりいはのう
への水

同様に「大幣」を詠み入れ、「なこし」に「和し」を懸けた歌と
して『相模集』（『私家集大成中古Ⅱ』29）の湯走百首の終夏に

251 おほぬさにちとせをかけていのかな神の心もなこしと思えば
とあり、好忠の詠歌と同様に荒ぶる神の心を和すことに視点を置き
ながら、大幣に千歳延命祈願した詠歌といえよう。

このようなことから考えると百首歌や定数歌において「夏越祓」
が主題として定着するには好忠百首の詠歌が基であり、特に、「み
なつき」や「なこし」の技巧に拠る詠歌は好忠が荒ぶる神を和すこ
とを主とした行事と捉えていたと推測出来るであろう。また、詠出
方法は屏風歌と同様に、祓の場としての川や川に関連する歌材や六
月祓や夏越祓の道具に拠つて延命や罪を祓い流すこと、それにより
心の清澄が詠じられている。それは定数歌と屏風歌との影響関係を
無視することは出来ないであろう。

また、堀河百首題と共通項目が多くみられる『古今和歌六帖』に
おいては歳時部、夏に「夏越祓」の項目がみられ十二首が配列され
ている。

109 みな月のなごしのはらへする人はちとせの命のおといふなり
110 おほぬさの河のせごと流れてもちとせのなつは夏はらへせん

111 みそぎつつ思う事をぞいのりつる八百万代の神のまにまに
112 此河にはらえてながすことのはは浪の花にぞたくふべらなる
113 みそぎつる河のせみればから衣ひもゆうぐれに波ぞたちける
114 そら見えて流るる河のさやかにもはらふることを神はきかなん

115 みもと河きけばおなじくおほぬさにかくはらふるを神は聞くら
ん

116 としなかにわがなげきとはなりぬればみそぐともよにうせじと
ぞ思ふ

117 君によりことのしげきに故郷のあすかの河にみそぎしにゆく
118 みそぎするならの小河の河風にいのりぞわたる下にたえじと

119 たつた河瀧のせぎりにはらへつついはひくらすは君がためとぞ
120 ねぎごともきかであらぶる神だにもけふのなごしのはらへとい
ふなり

これらは祓、禊、夏越祓、夏祓が詠み入れている。この十二首の
うち六首（110・111・112・113・114・120）は屏風歌に拠る詠歌で占めて
いる。これらは祓、禊によつて人々の罪や穢れを贖うとともに、荒
ぶる神を和す行事として詠じている。また、109の歌のように千歳延
寿を基とした行事とした詠歌である。

また、四首（116・117・118・119）は禊、祓うという行為に沿つて、
それに恋歌などの人事詠を寄せた歌であろう。そのうち、117の歌の
出典は『万葉集』の詠歌（689）であり、この歌のように「禊」によ
る詠歌の発想や詠作方法が「六月祓」詠出に際して基としているこ
とを看取できる。

このように、『古今和歌六帖』において「夏越祓」の歌の半分が

屏風歌であり、屏風歌と同様に恋歌などの人事詠が含まれていることから、「夏越祓」項目にはやはり屏風歌を踏まえ、恋歌等の人事詠を含まれたものとして項目を捉えていたことが伺える。

堀河百首題と共通歌題が見出される『和漢朗詠集』に主題として「六月祓」「夏越祓」の主題はないが夏の主題である「晩夏」に、順の月次屏風歌である一首(170)が配列されている。

170ねぎごともきかて荒ぶる神たちも今日はなごしと人はいふなり
このように、『和漢朗詠集』において夏越祓は晩夏の主題とし、その詠歌から、荒ぶる神を和す行事と意識されていたことが知られる。『和漢朗詠集』においてもやはり屏風歌の影響が捉えるであろう。

次に、勅撰集を取り上げてみよう。勅撰集において「六月祓」「夏越祓」を歌題として初出は『後拾遺集』であり、夏部立に一首(234)配列されている。

234みなかみもあらぶる心あらじかし波もなごしのはらへしつれば
この詠歌は「水上」に「皆神」を掛け、荒ぶる神の心を和すことを詠じている。また、この詠歌は『伊勢大輔集』40(『私家集大成中古II』24)の詞書に「歌合」とあり、歌合の歌題「六月祓」の詠歌とすることも可能であろう。だが、『後撰集』においては夏部に「夏祓」を詠じた歌(215)が一首見出すことが出来る。

215かも河のみなそこみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする
また、『拾遺集』においては夏部に二首(133・134)配列され、題知らずという詞書が付いているがいずれも「六月祓」の月次屏風歌であり、躬恒と長能の詠歌である。また、賀の部において一首、題知らず、詠み人知らずで一首(292)が配列されている。

133そきよみ流るる河のさやかにほらふることを神はきかなん
134さばへなす荒ぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり

292みな月のなごしはらへする人は千とせのいのちのぶというなり
以上のことから、勅撰集において「六月祓」が夏の歌題として定着するには屏風歌の影響を無視することは出来ないであろう。また、『堀河百首』成立以降の勅撰集においては『金葉集』三奏本に一首(147)、「千載集」に夏の歌題として三首(223・224・225)配列され、夏の歌題として定着の傾向が見られる。

『堀河百首』成立以前において「六月祓」「夏越祓」が歌題とした歌合を『平安朝歌合大成』拠ってみてみると、天喜四年七月六条斎院祓子内親王歌合が挙げられるのみであり、初出の歌合と言えらるであろう。歌題は六月祓・立秋・夜虫鳴初・七夕・祝・恋の六歌題で終夏から初秋の歌題で構成されている。このように歌合の歌題として六月祓は取り上げることが少ない歌題であり、しかも比較的新しい歌題と言えるであろう。

以上のように『堀河百首』成立以前における「六月祓」「夏越祓」をみてみると、やはり、屏風歌や定数歌における「六月祓」「夏越祓」は画題や主題の影響の大きさが指摘できるであろう。それは勅撰集や歌合において、夏の歌題として定着するにあたって影響を与え、また『古今和歌六帖』や『和漢朗詠集』にも影響を与えたことは看守できるであろう。しかも、それは歌題として定着化するだけでなく、発想や詠出方法にも影響を与え、殊に「六月祓」「夏越祓」において屏風歌や百首歌、定数歌の影響関係から編み出された表現などの詠出方法が指摘できるであろう。

三

『堀河百首』詠出歌人達は歌題「荒和祓」をどのように捉え、どう詠じたか歌を具体的に検討を加えてみたい。

先ずは詠み入れた歌材についてみてみよう。『堀河百首』十六首のうち、儀式を行う場所である「川」「川瀬」「川原」「沢辺」「河川」及び川に関連した歌材を詠み入れた歌は十首(545・546・549・550・552・555・556・558・559・560)と多数を占めている。それらは儀式を行う場であり、屏風歌以来の伝統的な歌材を用いた詠法と言える。その十首うちの三首(546・550・556)は歌枕や川名に拠った詠歌である。具体的にみてみると匡房の詠歌(546)が十六首の中で唯一歌枕を詠み入れられ、歌枕に拠る六月祓、夏越祓を詠んだ例歌は数多く挙げることができない詠法と言えるだろう。

546 松陰のとなせの水にみそぎしてちとせの命のべてかえらん

「戸名瀬」は山城国の歌枕であり、歌枕としては『堀河百首』詠出時代以前には例歌がなく、新奇な歌枕であり、『堀河百首』詠出時代の歌人達の例歌が多数あることから、注目された歌枕といえよう。例えば、公実や俊頼の詠歌にみられる。

256 惜しめどもよもの紅葉は散りはてて戸名瀬ぞ秋のとりなりけ
る (『金葉集』一一度本)

587 風ふけばとなせにおとすいかだしのあさの衣にしきおりかく

戸名瀬は紅葉と共に詠まれる歌枕であり、戸名瀬と禊の組み合わせによって、千歳延命を詠じている。その発想は『古今和歌六帖』109(『拾遺集』292)の詠歌を典拠とした詠歌といえる。

109 みな月のなごしのはらへする人は千歳のいのちのぶといふなり
このように、匡房の詠歌は新奇な歌枕「戸名瀬」や縁語の松を用いて千歳延命を技巧的に仕上げている。

源頭仲の詠歌(550)の夏川は夏の降雨量によって様相の変化する川で、単なる夏の季節の川である。

550 夏川にながすみそぎのおほぬさはたぎついのはねの浪かとぞみる
夏川を詠じた歌例は少なく、歌例としては『好忠集』173や『忠岑集』14(『私家集大成中古I』37)が挙げられ、しかも「六月祓」や「夏越祓」の詠歌にはみえず、それらを典拠とした歌材といえよう。

173 なつかわの瀬瀬にあゆつるますらをも我うきかけはみづからぞ
おもふ

14 なつかわのいはまをわくるいはちとりついにさてやはよおはつ
くさむ

また、夏川は『永久百首』の「樹陰」兼昌の歌にみられ、『堀河百首』詠出当時には夏の歌材として詠まれていたことが知られるだろう。

166 夏川のきしの柳の葉をしげみなみも木陰によるにぞ有ける

このように、源頭仲の歌はたぎつ浪を大幣に見立てという伝統的な詠法を撰取しながら夏川というあまり使用されない歌語を用いるという工夫によった詠歌である。

永縁の詠歌(556)の「みな川」は「みな川」のみなは掛詞であり、初句の「憂き事」に呼応させて、技巧的に夏越祓を背景に人事を連想される詠歌である。

556 憂き事をみな川の瀬にながすてふなごしの祓誰かせざらむ

管見の範囲では「みな川」を詠み入れた例歌は数少なく、『道濟集』80(『私家集大成中古I』156)に六月祓の屏風歌に詠じられており、それを典拠としたと考えられるであろう。

80 みな川のためる世もあらし年ことなごしのはらへこ、にきて

せん

また、永縁の歌の「みな川」は諸本によって異なり、群書類従本

系の伝本には「みな川」ではなく、「早川」となっている。「早川」は祝詞の六月晦大祓に「高山短山の末よりさくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織つ姫という神」とあることから、「早川」という歌枕による詠歌と捉えることも出来るであろう。また、道済の詠歌の初句「みな川」も諸本によって異なり、群書類従本には「水上」となっているため疑問が残るといえよう。

また、憂きことを流すという人事的要素を含んだ詠歌として河内の歌(560)がある。

560 川水にうきことの葉は六月のみそぎの瀬瀬にながすけふかな

このように川および川に関する歌材を詠み入れるという詠法は六月祓や夏越祓の行事の場であると共に六月祓の屏風絵との関係から出来上がった詠出方法を用い、新奇な歌枕や歌材に工夫が成されていると言えるであろう。

次に、六月祓や夏越祓の祓具である「大幣」「麻の葉」「斎串」「菅拔」を歌材とした詠歌が挙げられる。まず、「大幣」に拠った詠歌は次の二首である。

550 夏川にながすみそぎのおほぬさはたぎついはねの浪かとぞみる
559 思う事大ぬさにてぞ夏はつる川の瀬ごとに御祓をばする

「大幣」は貫之の屏風歌(132)以来詠じられた伝統的な歌材であり、源頭仲の歌(550)は大幣をたぎつ波に見立てており、伝統的な発想による詠歌といえよう。紀伊の歌(559)の思う事は『伊勢集』の屏風歌(82)に表現素材を求め、六月祓の行事に沿って恋愛を想起させる人事詠である。また、同じように、師時の歌(553)や国信の歌(547)に思う事が詠まれている。

82 みそぎつつ思ふ事をぞいのりつる八百万代の神のまにまに
まず、師時の歌(553)は思う事を同様に屏風歌の歌材である「麻

の葉」によった詠歌である。

553 麻の葉におもふ事をばなでつけて六月はつる御祓をぞする
この詠歌は『和泉式部集』39の歌の上句の語句を撰取し、儀式として麻の葉に撫で付けると言う儀式の行為に寄せて恋愛を想起させる人事を詠じている。

39 思うことみなつきぬとて麻の葉をきりにきりてもはらひつるかな
また、国信の歌(547)もやはり思う事と同様に屏風歌に「夏祓」

を歌材として求めている。

547 夏はらへ天つ社の神うけばわがおもふ事を空にかなへよ
とあり、「夏はらへ」に拠る歌例は少なく、やはり前掲の貫之の屏風歌(132)による歌語と言えるだろう。また、「天つ社」は『日本書紀』の神武記を典拠とし、歌例が挙げられない新奇な歌語を用いている。「神うけ」は『古今集』の詠歌(501)を発想の基とし、夏祓を背景に恋の思いを詠んだと捉えられるであろう。

501 恋せじとみたらし河にせしみそぎ神は受けずそなりにけらしも
十六首の中に「神うけ」に拠った歌として基俊の詠歌(551)が挙げられる。

「麻」を歌材としたのは肥後の詠歌(558)があり、「麻」に朝を懸けて朝夕と対応させ、「六月」「はつる」は伝統的な掛詞に拠って技巧的に仕上げている。

558 夏はつる夕になれば川浪にあさのみそぎをせぬ人ぞなき
師時の詠歌(553)と同じく六月祓の儀式の一つである「なづる」という行為を詠じた歌として俊頼の歌(552)が挙げられる。

552 沢辺なるあさぢをかりに人なしていとひし身をもなづるけふかな
な

この詠歌は浅茅刈って人形を作り、それに厭な事を避けたいという自分をなで付けるとし、六月祓における人形を作りそれに罪や穢れを撫で付けて流すという儀式の行為を背景として述懐的発想で詠じている。また、『俊頼髓脳』に長能の詠歌(66)が取り上げていることから、長能の歌を意識し、「さはへ」に「沢辺」「五月蠅」を掛け、機知に富んだ詠歌といえるだろう。また、十六首の中でこの詠歌のみ「祓」「禊」と言う歌語を用いることなく、六月祓を具体的に独創的に表現した特徴的な一首といえよう。

次に、「斎串」に拠ったのは基俊の詠歌である。

555 六月の清き川原にいくしたてはらふる事を神受けつらし

この歌以前に「斎串」に拠る六月祓の例歌は見えず新奇な歌材に拠る詠歌であり、斎串を立て、祓いをする事と拠って神が受けてくれたらしいとしている。だが、この詠歌以降、斎串に拠って六月祓を詠じた歌としては『隆信集』142(『私家集大成中世I』82)に142さは川のたえぬながれにいくしたていのる御祓も君が代のためとあり、この詠歌の影響が窺えるであろう。

次に、「菅拔」に拠る詠歌としては三首(548・551・557)挙げられる。

548 わぎも子か打ちたれがみのうちなびきすがぬきかくる夏祓かな
551 八百万神もなごしに成りぬらむけふすがぬきのみそぎしつれば

557 ちとせまで人なからめや六月のみたびすがぬきいのる御祓に

この三首以前に「菅拔」によって六月祓や夏越祓が詠まれた例歌は管見の範囲において『為信集』140(『私家集大成中I』93)に一首挙げられるのみである。

140 はらへするくさひとかたのすかぬきはしりそきそまつせられける

菅拔は茅輪ともいわれ、その材料は稲藁や茅や菅で作られ、これ

らを編んで輪にしたものである。

菅拔については既に指摘されているように、大江匡房の『江家次第』(『増補故実叢書』十七)に「延久四年六月、依勅定改直御座敷〔東面、〕今夜殿上并大盤所料令進人形・菅拔等」とあり、菅拔の行事が六月祓の儀式に行われていたことが知られ、菅拔は、おそらく延喜天曆年中に存在していたと考察されている⁶⁾。

『堀河百首』詠出時期に菅拔の詠歌があるということは、この百首詠出以前から六月祓に菅拔の儀式が行われていたことは確かである。祓具として菅拔が『堀河百首』詠出以前には詠出した例歌が為信の詠歌のみでそれ以降詠歌がなく、『同百首』詠出詠出歌人達によって採用された歌材と言えよう。

この三首の詠歌のうち、仲実の詠歌(551)において八百万神が詠まれ、それは前掲の伊勢の屏風歌(82)を典拠とし、「なごし」に和しを懸けて、神々を和ますための儀式と詠じている。しかも、「夏越」には「祓」と共に詠じた歌が数多く見られることから考えると、この詠歌の「禊」はやはり伊勢の歌を踏まえたといえらるであろう。

また、隆源の歌(557)は屏風歌や初期百首歌をみられる延寿を主題としているが、三度の菅拔によって祓うことによつて千歳延命を願う儀式を詠じている。師頼の歌(548)は好忠百首の歌(411)に「我妹子がゆらのたますじ」が「うちなびき」の序詞という技巧を求め、菅拔をかけて祓う様子に拠って夏祓を詠じている。

411 我妹子がゆらのたますじうちなびきこひしきかたによれるこいかな

「打ちたれ髪」は靡くを想起するものとし、堀河百首題「柳」の匡房の歌(114)にも用いられ、詠出時代には注目された歌材言えるであろう。

114 さほひめのうちたれがみの玉柳ただ春風にけづるなりけり

また、菅拔をかけて祓う様子は『法性寺閑白御集』（『群書類従』第九卷）の六月祓詩に「世上久為流熊。林鐘晦日祓除衆。詠無他詠千年興。（中略）未知何物號菅拔。結草如輪合首蒙。」とあり、菅拔を頭髮に蒙うとあることから、師頼の歌は我妹子の靡いている頭髮に菅拔を掛けて祓を行う様子が読み取れるであろう。

この三首のように、六月祓や夏越祓を菅拔という祓具による儀式を詠じているが菅拔という祓具による行事が実際にどのような行われていたか当時の文献上には見当たらず、具体的には解らないがこれらの詠歌から推測できるであろう。このように菅拔によるこの三首は顧みられなかった歌材による特徴的な詠歌と言えるであろう。また、菅拔に拠って六月祓の詠歌は『堀河百首』成立以降に見出すことができる。例えば、『金葉集』三奏本に一首（147）挙げられ、菅拔は歌材として定着が看取できるだろう。

147 みそぎする川瀬にたてるいくひさへすがぬきかけてみゆるけふ
かな

このことから、六月祓、夏越祓の祓具や儀式の行為に拠った詠作方法であり、それらの多くは屏風歌や初期定数歌の詠作方法を踏まえたものであり、しかも屏風歌や初期定数歌に詠まれていない祓具である斎串、菅拔と言う歌材を用い、儀式に沿いながらの詠作は特徴的な言えるであろう。また、菅拔に拠る詠作は顧みられなかった歌材であり、『堀河百首』以降、定着の傾向が伺えるであろう。

次に、「六月祓」「夏越祓」の屏風歌を典拠としている詠歌は挙げてみよう。まず、公実の歌（545）、藤原顕仲の歌（554）の二首は長能の詠歌（66）の「さばへ」を典拠とした詠歌である。前述のよう

に、この長能の詠歌は好忠百首の歌（551）を念頭に置いた詠歌と言えよう。

545 川の瀬になごしのはらへするけふやさばへの神も心よすらむ

552 沢辺なるあさちをかりに人なしていとひし身をもなづるけふかな

554 いにしへのさばへなしける神だにもけふの御祓になごむとぞ聞
く

この三首はいずれも長能の詠歌（66）の発想を基とした詠歌で、しかも「さばへ」は『万葉集』『日本書紀』に歌語を求め、掛詞「なごし」を用い、祓によつて荒ぶる神を和す行事として捉えて、六月祓、夏越祓を詠じている。

66 さはへなすあらふる神もおしなへてなごしのはらへなりけり

このように、荒ぶる神を和す行事としての発想に拠る類歌として仲実の詠歌（551）が挙げられる。

551 八百万神もなごしに成りぬらむけふすがぬきのみそぎしつれば

次に、河内の歌（560）は貫之や信明の屏風歌を基とし、歌語を求めて、詠作した人事詠である。

560 川水にうきことの葉は六月のみそぎの瀬瀬にながすけふかな

560 は貫之の詠歌（107）に発想や表現を求め、「ことの葉」の「こと」は「事」に掛け、しかも「うき」は「憂き」と川の縁語である「浮き」に掛け、「六月」は「みなつき」に掛けるという縁語、掛詞による技巧的な詠作と言えるだろう。また、前述のように『信明集』36（『私家集大成中古I』78）の屏風歌にもそれらを参考にして、罪や穢れを言葉に書いて祓い流すと言う儀式にそつて人事的要素を含んだ詠歌に仕上げている。

107 此かにははらへてなかつことのはは浪の花にそたくふへらなる

36みなかみにはらへて流す言の葉をおりなくこそせせのしら波
次に、十六首の中において序詞と言う修辭による類型歌として師
頼の歌(548)と顕季の歌(549)が挙げられる。

548 わぎも子が打ちたれがみのうちなびき菅抜かくる夏祓かな

549 六月の川ぞい柳うちなびきなごしのはらひせぬ人ぞなき

「わぎも子がうちたれかみ」「六月の川ぞい柳」は「うちなびく」の序詞であり、いずれも、靡くものからの想定であり、春季の堀河百首題「柳」に詠まれていた歌材でもある。前掲のように師頼の歌(548)は好忠の歌(411)を念頭に置いて、「打ち垂れ髪」は詠出当時の注目された歌語に拠る詠歌である。殊に、「川ぞい柳」は歌例の少ない表現であるがやはり、堀河百首題「柳」に四首(120・122・123・125)みえることから、詠出当時注目された新奇な表現であり、しかも季節を変えて使用した特徴的な詠歌であり、詠出の試みが伺えるであろう。

120 藻かり舟ほづつしめなは心せよ川ぞひ柳風に波よる

122 つなでひく川ぞひ柳春くれば水ととにぞ岸に波よる

123 春風になみよるととみゆるかな川ぞひ柳水にひかれて

125 河ぞいの柳のいと打ちはへてなみよる事のたえずも有るかな
また、「うちなびく」は兼盛の屏風歌(147)に「河風に吹く」とあり、河風からのを連想に拠ると考えることが可能であろう。

このように、序詞という修辭による詠歌は屏風歌や初期百首歌に見出せず、新しい詠作方法であり、歌人達の工夫よる特徴的な詠歌といえるであろう。

また、『拾遺愚草』1035(『私家集大成中世II』3)に

1035 誰がみそぎおなじ浅芽のゆふかけてまづ打ちなびくかもの川風とあり、『千五百番歌合』の六月祓の詠歌で、「うちなびく」という

表現がみられ、これらの詠歌を意識した詠歌といえよう。

このように、『堀河百首』成立以降において詠出方法の定着が看取できるであろう。

四

今回取り上げた年中行事題である「荒和祓」は既に指摘されているように、歌題設定や詠出方法に屏風歌や初期百首歌の影響が捉えられ、具体的に調査してみるとそのほとんどが屏風歌、初期百首歌の「六月祓」「夏越祓」の発想、表現、技巧などの詠作方法を基として詠歌であると言えるであろう。それは年中行事題と行うことで行事や儀式に沿って詠じるという限定が考えられ、新しい発想による詠歌はみられない。だが、歌材においては禊や祓えを行う場としての川や川に関連する場所や儀式の被具に拠った伝統的な詠作が多くを占めているがそのなかで新奇な歌枕である戸名瀬を用いたり、斎申のような新奇な歌材や菅抜のような顧みられなかった歌材を用いた技巧の拡張の試みが成されている。殊に、菅抜を歌材として用いた詠歌がみられることから、『堀河百首』以降、歌材として定着化の傾向が看守できるだろう。また、『堀河百首』詠出歌人達は複数の屏風歌や初期百首歌に歌材や表現を求めて詠作する傾向が指摘できる。特徴的な詠出方法としては、序詞による詠作が挙げられる。それは屏風歌、初期百首歌の「六月祓」「夏越祓」みることの出来ない新しい方法で、好忠詠歌の関与が認められるであろう。また、『堀河百首』の特徴の一つとしては「荒和祓」から荒ぶる神を和す行事と捉えた発想に拠る詠歌が挙げられ、それは歌題との関係が想定できるであろう。

このように堀河百首題「荒和祓」は屏風歌、初期百首歌の「六月

祓」「夏越祓」の詠出方法を基としながら詠出歌人達の工夫が随所に見出すことが出来るであろう。

〔注〕

- (1) 三原まきは氏「歌題の確立と変遷」〔学習院大学国語国文学会誌〕第38号H七・三、家永香織氏「堀河百首」と屏風歌・初期定数歌」〔国語と国文学〕H十年四月号
- (2) 松本真奈美氏「曾禰好忠「毎月集」について―屏風歌受容を中心に―」〔国語と国文学〕H三年九月号
- (3) 西山秀人氏「源順の歌風について―源高明大饗屏風歌を中心に―」〔古典論叢〕22H二・八、(2)の論文と同じ。
- (4) (1)の三原三原まきは氏の論文と同じ。
- (5) 『順集』12(『私家集大成中古I』94)では第二、三句が「きかすあらふるかみたにも」、第五句が「人はしらなむ」とある。
- (6) 菅原嘉孝氏「六月祓の本質について」〔すみのえ〕巻2号H5)
- (7) (1)の論文と同じ。

なお、本文に引用した『万葉集』、『古今和歌六帖』、『和漢朗詠集』、『和漢朗詠集』、『堀河百首』、『永久百首』、勅撰集は『新国歌大観』(歌番号も同本に拠る)に拠った。ただし、表記については改めたところがある。